

冬期の養成は図1からも分るように最低水温でも18℃以上であり、摂餌状況も悪くなく飼育も比較的安定している。本土においては低水温により、摂餌不良が原因となって体重の減少もしくは成長停止があるが今回の飼育試験では順調に摂餌して普通の成長曲線を示している。両区とも2尾ずつの尾数減少があるが斃死魚は確認しておらず不明魚となっている。

春先から初夏にかけての飼育では陸上池区でかん水性白点病による摂餌不良とそれが原因とみられる斃死（二次的な病害、ピブリオ病？）があり、生簀区においては原因不明による斃死魚が相つき、何れも夜間に生簀網の外側からのかみ傷によるもので加害動物はその傷から判断して、ガザミ類か、イカ類と考えられた。初夏から盛夏にかけての飼育では水温も上昇期にあり、それにつれて成長曲線も大巾に伸びるものと思われたが期待に反して投餌率、成長率ともに低率であった。陸上池区ではピブリオ病に類似した魚病により少尾数斃死、生簀区では2重網に処置したことによって斃死魚は出現していない。成長速度は両区とも急激な体重増加はみられず直線状態である。

盛夏から秋にかけては飼育水温も30℃以上が測定され年間を通して一番の高水温時期となった。陸上池区では2回、かん水性白点病の症状が認められたがそのたびに薬浴と池替えを実施したため完全に治療することができた。生簀区では21尾の斃死数があるが炎天下で測定を実施し、その翌朝斃死しているため高水温による魚体の疲労が原因ではないかと思われる。今回の試験から、マダイは沖縄では冬でも順調に成長すること。夏場にはむしろ少し高水温すぎるのか成長が期待した程良くはないこと。しかし、年間を通じて沖縄でも飼育できることが分った。

II マダイ親魚輸送試験

材料と方法

1 親魚の輸送

県内ではマダイ親魚の入手が不可能な為、県外から輸送する必要がある。航空路と海路の両方の輸送手段があるが輸送時間、輸送コスト、歩留り等を考えて飛行機を利用して輸送することとした。輸送用の容器は持ち運びやすさ、輸送コストの低廉化を考慮してコンパクトに造ってあるため、容器内収容の魚は梱包してから10時間前後が限度となっている。そのために、その時間の範囲内で輸送が可能な熊本県八代市と鹿児島県奄美大島から親魚を輸送することにした。

2 荷造り

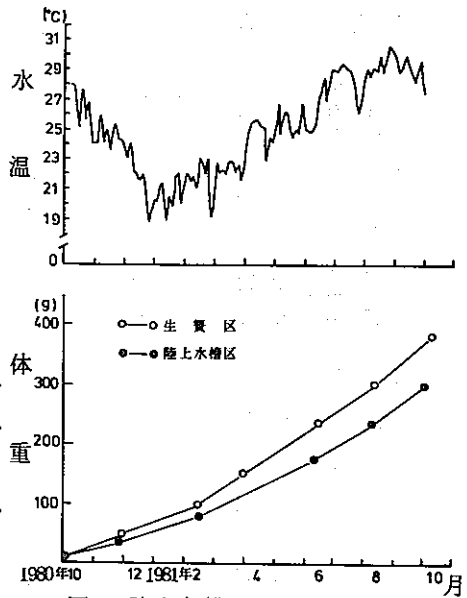


図1. 陸上水槽区における水温の年変動と両区の体重変化